大陸の主人は誰か？
――韓雪野の『大陸』にみられる現実認識

李海英（イ・ヘヨン／中国海洋大）

本稿では、韓雪野の『大陸』にみられる現実認識を検討することを通じて、韓雪野が五族協和や東亜協同体論に代表される日本帝国の言説を一定部分受け入れ、その枠組みの中で帝国のイデオロギーを批判したのかを核心的な問題として提起し、それと関連した諸問題に答えたい。結論から言えば、韓雪野は決して日本帝国の言説を受け入れず、またそれを基本的に否定した位置に、すなわち「満州国」の建国自体を否定する位置に立っていた。韓雪野は少なくとも、中国人の地である大陸において成り立つ、五族協和ないし東亜協同体であるならば、平等な関係に先立って、主人である中国人の許諾と同意があってこそ可能であると考えた。これは、日本帝国主義の武力と侵奪によって構想された東亜協同体論の根拠を否定したもので、東亜協同体の中における転向社会主義者らの限界を看破し、東亜協同体の存立根拠に疑問を提起しているのである。韓雪野は、大陸の主人は満洲人、民間の土着勢力であり、彼らの許諾と同意があってこそ、日本人が満州で協和を実現し、彼らの理想を実現していけると考えた。

韓雪野はまた、当時の満州言説とはまったく反対の「満州国」において、依って立つ場所さえない朝鮮人を描き出した。これは、他の作家らが五族協和の枠組みを受け入れ、東亜協同体論の枠組み、すなわち帝国の言説を受け入れて、その言説の中で批判しようとしたのとは異なり、韓雪野は「満州国」建国の不当性を指摘し、基本的にそれを否定したためである。日本の武力侵略によって立てられた「満州国」において、朝鮮人は本来のその土地の主人であった満洲人らには、日本人の手先として見なされ、日本人たちにとってはまた、道具程度にしかならないということ。だから、満州国で朝鮮人は、依って立つ場所さえないというのが韓雪野の認識である。大陸の主人は満洲人であるというのが、韓雪野の確固たる認識である。

これとともに、義勇軍を結成して日本に抵抗する抗日勢力ではあるが、あらゆる搾取と暴政を日常的に行い、満州の 3 千万の住民を窮乏と惨状に陥れた張本人である張学良も、やはり本来の大陸の主人ではなく、大陸の主人になる資格を喪失した大陸の浮浪者にすぎないというのが韓雪野の認識である。韓雪野は 1939 年の時点で、張学良の義勇軍の腐敗や無能、堕落に、反満抗日の失敗の原因を見出しているのである。張学良の軍閥の不順な抗日救国とその失敗に対する鋭利な批判は、KAPF（朝鮮プロレタリア芸術同盟）の作家としての韓雪野の理念的省察の結果なのであり、KAPF の理念に対する一貫した堅持によるものであろう。このような脈絡で、韓雪野は、『大陸』においては、彼ら抗日勢力の中に共産主義者などを含ませなかった。

（訳＝渡辺直紀）